主謂体用虚実篇

――中国語の品詞分類は可能か――

原島春雄

ぼくは現在、漢語いわゆる中国語を教えている。しかし、言語としての中国語に深い関心を懐くものではあってもそれを専門とするものではない。ここ十数年、さまざまな教科書を使いつつ中国語を教えそして学んできた過程で、専門的知識をもたない漢語という分野についてではあるが、素朴な疑問を懐かざるをえないのである。それは文字表記、発音を表す字母、文法の基本概念に亙るものである。本編ではこのうち文法に関わる問題について、これまで懐いてきた疑問とそれにたいする試論ないしは私論を述べてみたい。

一　主謂篇

中国の主要言語である漢語が他の言語と比べて独自のきわだった特徴を持っているのは「漢字」という文字表記の点にあると思われる。いかなる文字もおそらく象形文字に起源する。たしかに、ハングルのように直接表音文字を目指したものもあるが、これは文字の起源ではなく作成それも人為的作成というべきであろう。ところが、世界の文字の大多数はこの象形文字を表音文字に作り代えていった。すなわち、文字の「形」を「音」に収斂していったのである。その場合、音は音素であっても音節であってもかまわない。文字はそれぞれの言語の持つ音素ないしは音節の数に調整されることとなり、極端に数が少なくなる。ところが漢語の場合は異なる。文字と「音」との対応を前提としつつも文字の「形」を変えなかった。このため、文字の数が他の言語と比べて極端に多くなる。現在、日常的に用いられる基本文字は四千から五千、専門分野で必要とする文字を含めば八千から一万、特殊な文字と異体字なども含めるならば数万にのぼるのである。

このため、中国語の文字表記である漢字について抜きがたい誤解を生じさせることとなった。すなわち、中国語にあっては文字という「形」と「義」すなわち意味とが直接的な対応関係にある、いってみれば漢字は象形文字であるという誤解が生ずることとなったのである。しかし、いかなる言語であれ、文字の存在しない言語が数多くあることから明確であるように、意味すなわち「義」はなによりもまず「音」と対応しているのであって、「形」すなわち文字と

対応しているのではない。中国語も漢字という一見「形」と「義」が対応関係にあるように見えるが、他の文字を持つ言語と同様、「形」すなわち文字と「義」すなわち意味の対応関係はあくまで「音」を媒介させて始めて成立するのである。図式化するならば「形」「音」「義」の関係は以下のようになる。

しかし、中国語において文字（形）と意味（義）が擬似的対応関係を持つことにより、言語にたいする関心はなによりもまず「形」と「義」の対応関係に集中することとなった。中国の言語に関する学問が『説文解字』『爾雅』として結晶していったのはこのためである。こうして文字学、訓詁学の分野が形成されていった。ついで「形」と「音」の対応関係がサンスクリットの影響を受けつつ、音韻学として定着する。『切音』『広音』などはその成果である。そして、明清時代となり、「音」こそが言語の本質であることが認識されるようになり、「音」と「義」の対応関係が関心の的となるのである。顧炎武、戴震、王念孫、段玉裁、兪＊、章炳麟など考証学の珠玉ともいえる成果はこのようにして生まれたのである。中国の言語の学は「小学」と呼ばれてきた。「小学」はこのように文字学、訓詁学、音韻学の三分野を網羅していったが、文法の分野に及ぶことはついになかった。『文心彫龍』のような修辞学をテーマとする書物は現れたものの、体系的な文法書は中国の伝統学術には現れなかった。

中国が漢字という文字を持ったこと、それは、ぼくたちにたいへん貴重な遺産を遺してくれたといえよう。漢字は文字とはなによりもまず「音」との対応関係において成立しているという点では表音文字であるが、「形」と「義」との擬似的対応関係を持つため、他の純粋な表音文字が音声情報しか提供しないのにたいして、歴史情報を提供してくれる。この点は特筆すべきであろう。一例を挙げよう。為すという意味の「爲」という字はただたんに〈ＷＥＩ〉という発音を表しているだけではない。「爲」という字は〈ＷＥＩ〉という音を媒介として「為す」という意味と対応関係にあるが、「爲」という「形」は文字の字形のもつ原初的な意味を保っている。そして、その字形を分析するならばそれは象を使うという意味であることが、判明する。堯、舜、禹という聖王に祭り上げられた帝王のうち、舜は実は象使い部族の長であったが、この点は、「爲」という文字に込められた歴史情報によって証すことができるのである。

漢字という文字は「形」と「義」の関係においてははなはだすぐれた性能を発揮する。だが、「形」と「音」の関係においてははなはだしき困難が立ちはだかっている。「形」から「音」を引き出すことは、熟練しない限りまず不可能である。中国の言語の学が「形」「音」「義」の三者の関係に終始してきたのは以上のようないきさつがあったためであろう、一部の修辞学を除き、文の構造に眼が向かなかったのはやむを得ないことであった。中国で文の構造に眼を向けるようになったのは、皮肉にも異文化との接触の結果であ

る。すなわち、ヨーロッパ近代と接触した結果である。ヨーロッパの言語に精通していた馬建忠は『馬氏文通』を著し、中国のこの空白を埋めようとした。それは慶賀すべき第一歩ではあったが、たいへん不幸な結果をもたらすこととなった。馬建忠はヨーロッパの言語においては、文の構造が動詞によって支えられていることを発見し、動詞中心の文法体系を作っていった。この体系では、たとえてみれば、豆腐が文であるとすれば豆醤は文を構成する各要素、そして動詞がニガリにあたるのである。また、門が柱とドアによって成り立っているとするならば、動詞は蝶番の役割を担っている。動詞がこのような「要」の位置を占めているとするならば、他の要素は動詞との関係において確定することができる。馬建忠は中国語にこれまでなかった文の構造を分析する方程式をヨーロッパから導入した。こうしてヨーロッパの言語においては疑問を差し挟む余地のない方程式がそのまま中国語に適用されることとなった。その方程式の根幹にはつぎの二点があると思われる。

（1）S＋V＋Oの構造
（2）品詞分類

この結果、中国語においても

（1）主語＋動詞＋賓語
（2）実詞（名詞、動詞、形容詞）と虚詞（代詞、数詞、量詞、介詞、副詞、助詞、連詞、嘆詞）の品詞分類

が文法の根本に据えられることとなった。確かに、虚実、章句という中国の固有の概念を活かしつつ虚詞、実詞、また詞組という中国語の実態により即した文法概念を生み出したことは生み出した。しかし、根幹に据えられている上記の方程式があるかぎり、以下の日常的に使われる文章ですら解釈が困難となる。

今天來了客人。

この一句を動詞を中心として解釈するならば主語は客人でしかありえない。その結果、主語の倒置という例外を設けざるをえなくなるのである。また、人口に膾炙している

酒逢知己千杯少、話不投機半句多。

という一句は無主語となる。これは、主語を動詞と強制結婚させた結果である、と判断せざるをえない。

一体、中国語において主語を動作の主体として動詞に対応させることができるのであろうか。このような対応を前提として「作文」することは可能である。たとえば、「わたくしは本を買った」という文章を中国語に翻訳してみよう。

我買了一本書。

確かにこの文章は英語のS－V－Oの構造を持っている。しかし、つぎの文章と比較すれば、この文章がたまたまS－V－Oの構造となっているにすぎないことは明確である。

今天買了一本書。

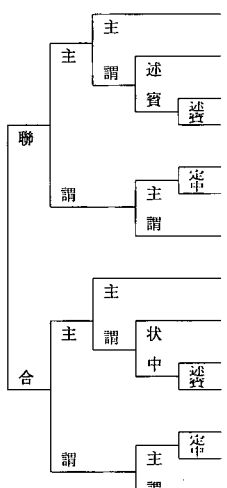
この文章は決してS－V－Oの構造と解釈しえないものである。しかし、「句」－漢語のセンテンスにおいて、「我」「今天」が同じ役割を果たしているのは歴然としている。「我」「今天」が果たしている役割と「買了一本書」が果たしている役割はそれぞれ「主語」「謂語」と考えられている。漢語はこの主語＋謂語の構造を基本とする。「買了一本書」という「句」も可能であるから主語は省略することはできる。すなわち、漢語の「句」の基本は

（主語）＋謂語

ということになる。また、この（主語）＋謂語が複数繰り返され聯合式となることは妨げない。漢語にあってはヨーロッパ諸語とは異なり主語に対応するのは動詞ではなく、謂語である。そしてこの（主語）＋謂語の構造の主語と謂語の部分に詞組を組み入れることによって「句」は完成するのである。詞組の類型についてはさまざまな説を立てることが可能であるが、ここでは以下の六式にまとめておく。

（1）主謂式：主語＋謂語
（2）述賓式：述語＋賓語
（3）聯合式
（4）定中式：定語＋中心語（偏正式1）
（5）状中式：状語＋中心語（偏正式2）
（6）中補式：中心語＋補語（偏正式3）

詞組はこの六式を基本としつつ、さらに各式の要素に六式を組み入れることによって作成することができる。先に例として挙げた「酒逢知己千杯少、話不投機半句多」という文章によって詞組と句の関係を見てみよう。

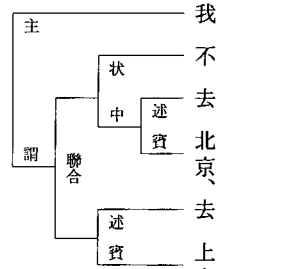


この文章は五つの階層によって成り立っている。第五の階層が「句」となっているほか、他の四階層はいずれも「詞」（第一の階層においてのみ現れる）ないしは「詞組」である。漢語にあって注目すべきは、「詞」「詞組」「句」の構造が完全に一致している点であ

る。そして、漢語の生命は「詞」と「句」を媒介する「詞組」にあると思われる。そして、「詞組」が階層を形成することによって「句」における表現の豊かさが実現されているのである。このように「詞」が階層的に「詞組」を構成し、その「詞組」を「主謂」構造において統合する、そこに漢語の生命が存する。

「句」が陳述として全体を表すとするならば、「詞」ないしは「詞組」は全体を構成する部分であるが、「句」は単に「詞組」という部分の算術的総和ではない。オーケストラにおいて各パートがそれぞれの役割を果たしつつ、メロディーを奏で、ひとつの全体的ハーモニーを構成するのと同様、「詞」ないしは「詞組」は「句」において単なる構成要素ではなく、ある役割を果たしつつ「句」という全体のなかで機能しているのである。オーケストラにおいてバイオリンが独奏している場合、それは「詞」に譬えることができる。また、チェロとクラリネットとフルートがメロディーを奏でているとき、それは三つの「詞」からなる「詞組」に譬えることができる。その場合、あくまで全体のハーモニーのなかでのみこのメロディーは意味をもつ。このように「句」のなかで、役割を果たしつつ「句」構成する「詞」ないしは「詞組」を「語」と呼ぶ。例を挙げてみよう。

我　不　去　北京、去　上海。



この「句」の「詞」のレベルは「我」「不」「去」「北京」「上海」であり、それぞれ「私」「ない」「行く」「北京」「上海」を意味する。「詞組」の第一階層「去北京」は「北京へ行く」、第二階層「不去北京」「去上海」はそれぞれ「北京に行かない」「上海に行く」、第三階層「不去北京、去上海」は「北京には行かずに上海に行く」となり、「句」全体では「私は北京には行かずに上海に行く」という意味になる。このように「語」は「句」「詞」「詞組」に還元しえない役割を果たしているのである。上述したように漢語にあっては「詞」「詞組」「句」は同じ原理すなわち六式によって成り立っている。「詞」のレベルで考えてみよう。

國營　心疼　性急など…主謂式
司令　發言　革命など…述賓式
國家　美麗　看守など…聯合式
國旗　美人　動物など…定中式
瓦解　回想　血紅など…状中式
改正　展開　扇動など…中補式

「詞」とは「詞組」が社会のなかでひとつの意味として市民権を獲得し、辞書に登録されたものをいう。それ故、「詞」は文法上の単位ではない。たとえば「清朝を革命する」にあたる漢語を書いてみよう。それは、「革清朝的命」であって、けっして「革命清朝」ではない。すなわち、「詞組」本来の機能を失うことはないのである。

つぎに「詞組」のレベルで考えてみよう。事態は一気に複雑化する。たとえば「我去」という「主謂式」の「詞組」はどういう意味なのであろうか。三つの可能性があるように思われる。すなわち、「ぼくは行く」「ぼくが行く」「ぼくなら行く」の可能性である。この「我去」という「詞組」をつぎの「句」のなかで考えてみよう。

今天　我　去。

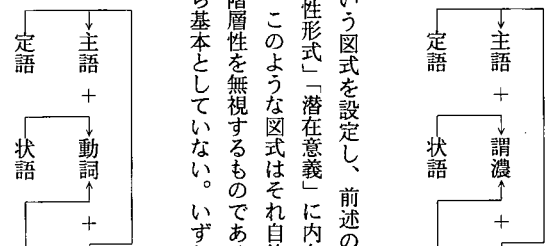
「我去」という「詞組」はどのような意味となるのであろうか。「今日はぼくが行く」「今日ぼくは行く」「今日ぼくが行く」「今日だったらぼくが行く」――さらに別の意味をもつかもしれない。では、「句」の意味を決定するのはいかなるものなのか。この点、漢語はヨーロッパの言語とも、日本語とも決定的に異なる。「句」の意味を決定するのは「言語の場」であるからである。一般的にいってぼくたちは言語を「読み取る」ことを前提に言語を「読み込む」。しかし漢語の場合、言語を「読み取る」作業は、言語を「読み込む」作業を前提として行われなくてはならない。

「述賓式」の場合、さらに複雑である。「打」という述語にいくつかの賓語をつけて「詞組」を作ってみよう。「打棒球」「打飯」「打醤油」「打水」「打　棒」「打字」「打北京隊」という「詞組」を翻訳するならば、それはそれぞれ「野球をする」「ご飯を取ってくる」「醤油を買う」「水を撒く」「こん棒で殴る」「タイプを打つ」「北京チームと試合をする」または「北京チームを打ち負かす」「北京チームでプレーする」となる。このように述語と賓語の意味関係は同じ述賓式にありながら千変万化する。それだけではない。賓語は動作を表す述語の主体にもなりうる。つぎの文章を見ていただきたい。

今天來了客人。

これは「今日、客が来た」と訳すほかはないであろう。主語＋謂語、述語＋賓語という形式は一定であるが、その意味関係は形式の裏に隠れており、言語の場において確定しなくてはならない。この表の形式、すなわち六式と裏の意味関係をそれぞれ「顕性形式」「潜在意義」と名付けておこう。

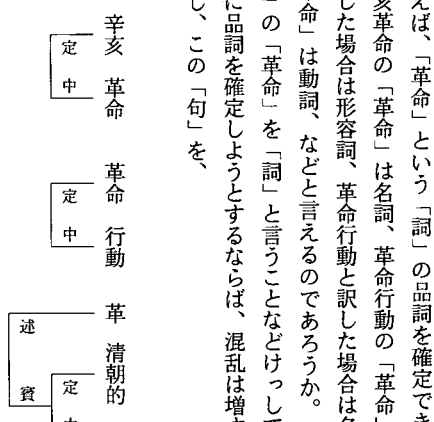
漢語の構造は六式に基づいた「詞組」の階層的秩序こそその本質であると考えられるが、かりに一歩譲歩して



という図式を設定し、前述の六式を図式化するのであるならば、「顕性形式」「潜在意義」に内在する問題を明らかにすることはできる。このような図式はそれ自体漢語の豊かさをを保証する「詞組」の階層性を無視するものである。しかし、現在の教科書はこの図式すら基本としていない。いずれもS＋V＋Oに模した

という図式を基本としている。そして、動詞を前提として名詞、形容詞を確定し「動詞述語文」「形容詞述語文」「名詞述語文」といった文型を並べていくのである。そして「名詞」「動詞」「形容詞」という三大品詞を前提としつつその他の品詞「量詞」「代名詞」「副詞」「前置詞」「接続詞」「助詞」「感嘆詞」と確定していくのである。混乱は増すばかりである。

前述のとおり漢語にあっては一音節の「詞」を除いて「詞」は「詞組」が社会的に定着したものであり、文法的概念ではない。たとえば、「革命」という「詞」の品詞を確定できるのであろうか。辛亥革命の「革命」は名詞、革命行動の「革命」は革命的な行動と訳した場合は形容詞、革命行動と訳した場合は名詞、革清朝的命の「革命」は動詞、などと言えるのであろうか。しかも、「革清朝的命」の「革命」を「詞」と言うことなどけっしてできない。このように品詞を確定しようとするならば、混乱は増すばかりである。しかし、この「句」を、



と解釈し、その「潜在意義」を考えればたちどころに氷解する。漢語においては文法的概念としての品詞がまったく必要のないことは自明である。漢語にあっては文法的概念として「詞組」と「語」そして「句」という概念があれば十分である。

さて、主語＋動詞＋資語という方程式を中心に漢語の文法を構築するならば、ことに主語と資語について漢語の実態に適合しない解釈が続出することとなるのはさきに見たとおりである。それは、主語（名詞）＋述語（動詞）＋資語（名詞）という暗黙の前提があり。主語とは動詞の主体を表す名詞を表し、資語とは動詞の目的語を表す名詞と考えるためである。一方、漢語の実態に即しつつ、主語は謂語にこそ対応するものであると考え、しかも、「潜在意義」は

「言語の場」によって決定されると考えるならば、漢語における主語はほぼ以下の四つの意味関係に集約することができる。すなわち（1）主題（2）状況（3）条件（4）動作の主体としての主語、である。例を挙げてみよう。

北京、我没有去過。（主題）　北京へは行ったことがない。
今天我去北京。（状況）　今日、ぼくは北京へ行く。
他去北京好。（条件）　彼が北京に行けば良い。
今天他去。（主体）　今日は彼が行く。

また、資語も多様な「潜在意義」をもつことができる。日本語の「を」「に」「へ」「から」「によって」「で」「が」などの意味関係を表し得るのである。

買了書。（を）　本を買った。
住北京。（に）　北京に住む。
去北京。（へ）　北京へ行く。
回學校（から）　学校から帰る。
洗熱水。（で）　お湯で洗う。
死了人。（が）　人が死んだ。

日本ではいわゆる「漢文訓読」という形式で千数百年にわたって漢語に親しんできた。それは、漢語という日本語とは異なる言語を読み解く知恵であった。漢文訓読とは返り点と送り仮名を基本とするが、返り点とはまさに「詞組」の階層的構造を明らかにする装置であり、送り仮名とは「潜在意義」を明らかにするものであった。ぼくたちがこの遺産を捨てて、S＋V＋Oの構造、そして品詞分類に振り回されるのは不可思議という他はない。

漢語の主謂構造および述賓構造において、「顕性形式」（文法形式）から「潜在意義」（意味関係）を引き出すことができないように、その他の聯合構造、定中構造、状中構造、中補構造においても「潜在意義」を決定するのは「顕性形式」ではなく「言語の場」であることは言うまでもない。小論では紙幅の関係から漢語における「主語」と「賓語」の性格にとどめ「定語」「状語」「補語」の性格については贅言しない。ただ、主謂式と定中式および状中式、述賓式と中補式に親和性があることは指摘しておきたい。

二　体用虚実篇

漢語は「詞」を含んだ意味での「詞組」が「句」のなかで「詞組」に還元しえぬ役割、すなわち「語」として機能している点にその特徴がある。かつて「詞組」は「仂語」と呼ばれてきた。このようにして「詞」と区別してきたのである。「詞」は社会的に確定した概念であり、文法的概念でないことは先に見た。だとするならば、「仂語」は名称として「詞組」と比べより適切であろう。しかし、文法概念として「詞」という概念を立てる必要がないとすれば、ことさら「仂語」という概念を立てる必要もないであろう。「詞」「詞組」を包摂する概念として「語」という概念のみで十分である。この「語」はひとつの文章として完成したとき、その「語」は「句」

となる。中国では「文法」を「語法」と呼んでいるが、きわめて適切な名称であると思う。

では、「語」が「詞」「詞組」と異なる点は、何処にあるのであろうか。それは、つぎの二点にあると思われる。すなわち、

（1）脈絡作用
（2）語気作用

である。日本語の「象は鼻が長い」という文章を漢語に訳してみよう。

大象　鼻子　長。

日本語の「象は鼻が長い」において、「象」「鼻」は単語、中国語の「詞」にあたるが、「象」「鼻」だけでは文法上いかなる役割も果たしていない。それぞれ「象は」「鼻が」となってはじめて文法上の役割を果たしているといえるのである。漢語においても同様である。「大象」「鼻子」は「詞」としてはいかなる語法上の役割を果たしていない。しかし、「鼻子長」という謂語に対応する主語としての「大象」、「長」という謂語に対応する主語としての「鼻子」はそれぞれ「語」として語法上の役割を果たしているのである。この日本語の「象は」「鼻が」にあたる漢語の「語」としての「大象」「鼻子」が語法上の役割を果たしうるのは、それが「脈絡作用」をもつからである。

一方、「長」はどうであろうか。そこには「陳述」の「語気作用」が込められている。「詞」としての「長」は「長さ」「長い」「長く」「長くする」という意味になりうるが、それはあくまで「句」のなかで「語」の役割を果たしてはじめて一定の意味を獲得するのであって「詞」の「長」が先験的に一定の意味をもっている訳ではないのである。「大象鼻子長」という「句」において「長」は主語の「鼻子」に対応する「謂語」の役割を果たすことによって「陳述」という「語気作用」を獲得している。同様に「詞組」を構成している「鼻子長」も主語の「大象」の謂語になっており「語気作用」をもつ。

漢語にあっては他の言語と同じく「句」は必ずしも「脈絡作用」は必要としない。たとえば、「去」という「句」を考えてみよう。この「句」は「言語の場」において「行け」「行きなさい」「行ったら」「行くの」「行ってしまった」などさまざまな意味をもちうる。この「句」は主語のない謂語のみによってなりたっている。先に見たように漢語は

（主語）＋謂語

を基本としている。この事実は謂語こそ漢語の「句」の本質であることを示している。だが、なに故、漢語において謂語が「句」の本

質であるのか。それは、謂語が「語気作用」をもつからである。それにたいして主謂式を含む六式は「脈絡作用」を表す。まとめるならば、

詞　それ自体、文法上の役割はない。ただし、内部構造には文法的構造をもつ。

詞組　それ自体、文法上の役割はない。ただし、内部構造には文法的構造をもつ。

語　謂語を除いて「脈絡作用」をもつ。

謂語　「語気作用」をもつ。

中国には「体用」という概念がある。本体と作用と考えて大きな過誤はないと思われる。それは海に譬えていうならば、海水は「体」、波と海の色は「用」である。この「体用」という概念を漢語の語法に譬えるならば、「体」は「詞」「詞組」に、「用」は「語」にあたる。「詞」「詞組」は言わば海の水、「語」（「謂語」を除く）は海の波、「謂語」は海の色ということになるであろう。「詞」「詞組」「語」「句」という文法の基本概念は「体用」の論理において整然たる秩序を保っていると考えられるのである。

漢語は「詞」を含む「詞組」を「語」として確定し（顕性形式）その「脈絡作用」および「語気作用」（潜在意義）を「言語の場」において確定することによって「句」の分析は完了する。そこに品詞の概念を介在させる余地はない。このような漢語の性格をとらえて「論理的ではない」「曖昧である」との指摘がこれまでなされてきた。また、冒頭指摘した漢字とは象形文字ではないのかという誤解と相俟って漢語には根本的な欠陥あるのではないか、という意識が醸成されてきた。これらの疑問にはつぎのような答えが可能である。まず「漢字は象形文字ではないのか」という疑問には、これは完全な誤解であると答えることができる。「漢語は論理的ではない」という疑問には、いかなる言語も百パーセント論理的であると答えることができる。論理の形式は異なるかも知れないが百パーセント論理的でなければどのようにして意思を疎通させることができようか。さまざまな疑問のなかで検討を要するのは「漢語は曖昧なのではないのか」という疑問についてであると思われる。

漢語の「曖昧さ」があるとすれば、それは「脈絡作用」と「語気作用」という言語の本質に関わるものが言語の形式（たとえば格変化やテニヲハ）ではなく「言語の場」に委ねられているために発生する現象である。「象は鼻が長い」の例で見てみよう。

漢語（文字）	漢語（音声）	日本語
大象鼻子長。	大象＝鼻子長。	象は鼻が長い。
大象鼻子長。	大象＝鼻子＝長。	象は鼻は長い。（尻尾ではなく）
大象鼻子長。	大象鼻子長。	象が鼻が長い。（ライオンではなく）

（＝の記号は息をいれることを意味する）

この例の場合、日本語においては言語の形式において意味が確定さ

れているが、漢語の場合は意味の確定は「言語の場」に委ねられている。しかし、漢語においても音声として表現されるならば、息を入れるという言語の形式によって意味を確定することができる。英語の場合はどうであろうか。「The trunk of elephant is long.」という表現以外、説明を加えることなしに言語の形式としてこの三つの意味関係を区別できるのであろうか。この場合は英語の方が「言語の場」に依存していると言うべきである。また、日本語の「泳ぐことができない」という文章について見てみよう。

日本語	漢語
泳げない。（溺れるため）	不會遊泳。
泳げない。（ある事情で）	不能遊泳。
泳げない。（危険すぎて）	不敢遊泳。

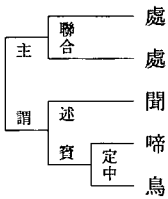
この例文の場合、日本語が漢語に比べて「言語の場」にたいする依存度が格段と強いのは明白である。だとするならば、いかなる言語も意味の確定は「言語の場」に依存しているのであって、意味の確定における「言語の場」にたいする依存は漢語の専売特許ではない。したがって、「曖昧さ」も漢語の専売特許ではない。

人は、しばしば漢語は「曖昧」であるという。それが、「言語の場」と「言語の形式」と「意味の確定」について言われるならば、上述のように肯首しがたい。しかし、漢語のある特徴をとらえていうならば、それはまた否定しがたい。ぼくはこの特徴を「曖昧さ」と言わずに「詩的表現」と言いたい。例を人口の膾炙したつぎの詩に取ってみよう。

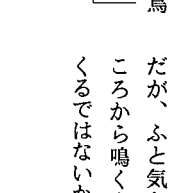
春曉　孟浩然

春眠不覺曉　春眠暁を覚えず
處處聞啼鳥　処々に啼鳥を聞く
夜來風雨聲　夜来風雨の声
花落知多少　花落ちること知りぬ多少ぞ

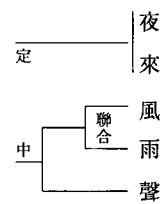
この詩の語法的構造を示しつつ、かつその「潜在意義」を示すため、拙訳を掲げておく。



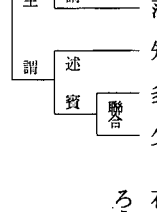
春眠不覺曉　春の眠りとは暁の時さえ気が付かせぬものなのであろうか



處處聞啼鳥　だが、ふと気が付いてみると至るところから鳴く鳥の囀りが耳に入ってくるではないか



昨夜来、しきりと風雨の音がしていたが



花はいったいどれほど散ったのであろうか

拙訳のほかさまざまな訳が可能であろう。ことに、中国の詩に関して顕著なのであるが、読者は「言語の場」を自ら設定することが、すなわち「読み込む」ことが求められる。このことが人びとに「曖昧さ」と写るまであろうか。中国はこのような「詩的言語」を極限にまで発展させてきた。四六駢麗体、古典詩はその典型のである。しかし、漢語は「詩的」言語ではあっても「曖昧」な言語ではない。それは小論の主題である漢語における「品詞」の問題と深く係わる。

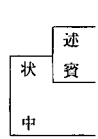
漢語の語法に関し、馬建忠以来ヨーロッパ諸語の概念に振り回されてきた。その最たるものがSVO構造と品詞分類であることは見てきた。漢語という言語を見る場合、なに故、中国が長い歴史を通じて育んできた概念によって分析することなしに、異質の概念によって分析しなくてはならないのであろうか。この点は筆者にとって年来の疑問である。

「詞」はその内部構造は語法的ではあるが、それは社会的に成立したものである。漢語にあってことに特徴的な表現に四字成句があるが、それは「詞組」が語法に基づいて社会的、歴史的に認知された表現にほかならない。四字成句に歴史故事に基づくものが多いのはそのためである。このような「詞」を形式的に分類し、文法上「品詞」として固定化することはできない。だとするならば漢語において「品詞分類」は一切不要であろうか。

つぎの例文を見てみよう。

他已經到北京。　かれはすでに北京に到着した。
他已經到北京來。　かれはすでに北京に到着した。

「到北京」と「到北京來」は日本語の意味は同じであるが、漢語の語法構造は異なる。



再び「打北京隊」の例を見てみよう。

打北京隊。→把北京隊打（敗）。　北京チームを敗る。

打北京隊。→和北京隊打。　北京チームと試合をする。
打北京隊。→在北京隊打。　北京チームで試合をする。

例文における「到」「把」「和」「在」は語法上役割を果たしているものの、意味上はすでに「到る」「把える」「ともにする」「在る」という意味を失い、それぞれ「に」「を」「と」「で」という日本語の「テニヲハ」にあたる意味しかもっていない。このような現実の世界に対応する事物、事象をもたない現象を「虚指」という。漢語は語法上固定的な「品詞分類」は不可能であるであるが、このような「虚実」の分類は可能なのではなかろうか。

「虚指」「実指」とは現実の世界に対応する事物、事象をもつかいなかによって区分しうる。しかし、「虚実」を截然と区分することはできない。たとえば、「名詞」的な意味をもつ「詞」を例にとってみよう。「書」(書物)、「本子」(ノート)、「鉛筆」などはそれぞれ「這」(これ、それ)、「那」(それ、あれ)、「　」(どれ)と交換可能である。だが、「書」「本子」「鉛筆」は現実の世界に対応する事物、事象をもつ。それ故、「実指」であり、実詞に比定して差し支えない。それにたいして「這」「那」「　」は現実の世界に対応する事物、事象をもたない点では「虚指」であり虚詞に比定して差し支えない。ところが、「一個人」の「個」は名詞的な意味をもつ「量詞」であるが、「個」という詞に対応する事物、事象はない。この意味で完全に「虚指」である。しかし、おなじ機能をもつ「一椀飯」といったとき、この「椀」は「実指」の要素を色濃くもつ。だとすれば、「詞」を截然と「虚詞」「実詞」と二分することはできない。ある「詞」に関しある場合は「虚指」ある場合は「実指」といえるだけである。たとえば、

他到北京。　(かれは北京に着いた)

の「到」は「実指」であるが、

到北京去。　(北京へ行く)

の「到」は「虚指」である。

中国の思想においては「陰陽」をはじめ対立する概念はしばしば相互に転化する。「大小」「上下」「長短」など、対立する概念はつねに相対的である。このような現象を「対待」という。「虚実」についても同様であり、「虚」が「実」に転化し、「実」が「虚」に転化することは、中国の思想からみて極めて正常なのである。それ故、「詞」を「実詞」と「虚詞」に分類することは不可能であろう。ある「詞」に関し「句」において「実指」であるのか「虚指」であるのかを判断すれば十分である。この点からも漢語において品詞分類をすることは無意味である。

「体用」「虚実」という中国の思想的伝統に根差した概念はヨーロッパの文法概念と比べて漢語の分析に有効であるのは、当然といえば当然である。だが、「体」すなわち「詞」ないしは「詞組」、「用」すなわち「語」という「体用」と「虚実」との関係はいかなるものなのであろうか。漢語においては「用」すなわち「脈絡作

用」と「語気作用」はしばしば「言語の場」に委ねられている。しかし、この「用」を「虚実」のなかで考えてみるならば、そこに興味深い現象が見られる。

洗熱水。（お湯で洗う）　洗衣服。（服を洗う）

という漢語を

用熱水洗。（お湯で洗う）　拿衣服洗。（服を洗う）

と書き換えてみるならば、「用」「拿」は「虚指」であり、「脈絡作用」しかあらわさない。しかし、「潜在意義」すなわち隠れた意味関係を顕在化させる作用をもっている。漢語はけっして曖昧な言語ではないのである。「言語の場」に「用」すなわち「脈絡作用」と「語気作用」が託されている場合、それは「潜在意義」を顕在化させる必要がないからである。その必要が生じたときには「虚指」の「詞」を介在させればよいのである。この点、漢語は「詩的」言語を保ったまま論理性を獲得しているといえよう。

漢語の文法は「語法」であり品詞分類を介在させる必要はまったくない。もしあるとするならば「虚指」についていくつかの類似した「詞」を範囲を限定することなくまとめることができるだけである。「詞類」ということばがあるが、それで十分であろう。ここでは「体」の働きをもちやすい「代詞類」「量詞類」、「用」の働きのなかで「脈絡作用」をもちやすい「介詞類」「連詞類」、また「語気作用」をもちやすい「副詞類」、両者を兼ねる「助詞類」がありうることを指摘しておくにとどめる。

漢語は「詞組」をもつことによって豊かな表現が、「虚指」をもつことによって論理的表現が、そして、「虚指」の「詞」がなくとも語法として成立することによって詩的表現が可能となっているといえよう。

〔付〕本文は退休される高田淳先生とともに中国語教育に携わり、そして指導を受けたことに思いを馳せつつ執筆しました。